集刊東洋学 第一一三号 平成二十七年六月 六四－八三頁

黄宗羲の明文総集編纂と詩文観

――「習気」の批判と「性情」の重視――

豊島 ゆう子

問題の所在

明末清初の思想家・黄宗羲（一六一〇年－一六九五年）は康熙年間（一六六二年）に入って以降、『明儒学案』の編纂や講学活動を行うと同時に、『明文案』等の文集編纂や、詩文の執筆にも力を注いだ。

筆者は前稿において、黄宗羲が自身をとりまく具体的な状況の中で師の劉宗周の思想を受容し、そこから「成説」を墨守する態度に対して「深思」「自得」を重視する学問観を完成させ、その学問観を『明儒学案』を構成する一要素へと発展させていったことを論じた。そして上下二篇からなる「明文案序」に代表される黄宗羲の詩文観も、黄宗羲の学問観の一角をなしており、『明儒学案』成立の背景を総合的に検討していく上でも手がかりになるのではないか、との見通しを立てた。[1] このような見通しに基づく検討の前提作業として、本論では黄宗羲の「明文案序」および黄宗羲の編纂した明文総集を出発点とし、黄宗羲の詩文観を検討していきたい。

黄宗羲が『明儒学案』を編纂した一方で、明一代の文を収集した総集を編纂したことはよく知られている。具体的には、先に挙げた「明文案序」の冠せられた『明文案』、『明文案』を増補修訂したものと考えられる『明文海』、そして黄宗羲の子・黄百家のために『明文案』『明文海』の中から優れたものを選び、評語を加えた『明文授読』がある。これらについての研究として、福本雅一氏は『明文授読』の評語を取りあげ、その選択の特徴をまとめている。[2] その後、野村鮎子氏は『明文案』の版本調査をおこない、その特徴を分析している。[3] そこで、本論第一節ではまず両氏の研究成果を紹介し、問題の整理をおこなった上で、黄宗羲の「明文案序」および黄宗羲の編纂した明文総集に、どの

ような詩文観が見られるかを検討する。

次に、本論第二節では、第一節で検討した「明文案序」及び明文総集にみられる詩文観の特徴について考察を深めるために、黄宗羲の他の著述に現れる詩文観を分析する。黄宗羲の詩文観については、既に多くの先行研究があり、黄宗羲が「性情」を重視し、模倣を批判していたこと、その背景には清初における古文辞派に対する批判の風潮があったことが指摘されている。福本雅一氏は、「排他的な画一主義」を批判し「自己の心情に忠実な、個性的な詩」を重視したとし、その理由としては、「擬古派の付和雷同と模擬剽窃」を批判した銭謙益及び艾南英の影響を受けていたことを挙げる。[4] 項念東氏は、黄宗羲が「学」に基づいた「性情」を表現した詩を理想としたことを指摘している。[5] これらに関して、本論第二節では、特に本論第一節の考察に基づいて黄宗羲の重視する「性情」の内容を習気との関わりから分析したい。

その上で、第三節ではそのような黄宗羲の詩文観が、明末及び同時代の文人批判にどのように現れているのかを確認する。黄宗羲の文集編纂と詩文観、そして明末及び同時代の文人批判について、ひとつの脈絡をもったものとして説明されるようになれば、同時代に編纂された『明儒学案』の編纂背景を考えていく手がかりにもなると思われる。[6]

第一節　黄宗羲の明文総集の特徴

（1）先行研究の成果

初めに、『明文案』『明文海』『明文授読』に関して、先行研究の成果を紹介していきたい。

まず福本雅一氏は、[7]『明文授読』の収録内容を調査し、「六十二巻に収める作家凡そ三百、篇数凡そ七百八十」という全体数と、十篇以上採録されている作家と採録数について調査している。これについて福本氏が挙げている傾向の一つは、「自己と傾向・主張を同じくする、帰有光、銭謙益、艾南英を録することの多いのに比し、擬古派の作は、殆ど黙殺していること」である。確かに、黄宗羲はその明文総集の中で、銭謙益・艾南英については批判をしつつもその作品を多く採録し、一方古文辞派については、批判した上で殆ど採録もしていない。では、黄宗羲はどのような基準によって判断し、結果的にそのような態度の違いが生じることになったのだろうか。そこで、本論では過去や同時代の文人に対する黄宗羲の批判について、いくつかの事例を取りあげて分析し、その中に窺える黄宗羲の問題意識について考える。

次に、野村鮎子氏は、『明文案』『明文海』が採録する帰有光の文を調査し、黄宗羲は銭謙益の手が加わっている帰

荘の康熙年間刊『震川先生集』（康熙本）に拠らず、万暦年間に刊行された崑山本・常熟本に拠っていることを明らかにしている。[8] また、氏は「明文案序」及び『明文案』について分析し、現存する「明文案序」の諸本間に文字の異動が存在し、そこには、黄宗羲の銭謙益観が関係していることを指摘した。[9] さらに、氏は『明文案』の中で採録篇数の多い作家二十人を挙げ、その特徴として、『明文案』が最も多く採録するのは銭謙益の文であることと、古文辞派に対して「冷淡」であり、「唐宋の古文を継承した作家」に評価の主眼があったことを指摘する。氏の一連の研究によって、「明文案序」および『明文案』の内容や編纂資料の選定といった場面に、銭謙益批判など黄宗羲個人の考え方が反映されていることが明らかになった。[10]

ところで、氏は「明文案序上」において『明文案』の編纂基準として挙げられる「一往情深」という言葉が、帰有光の文章に対する黄宗羲の評価にも使用されていることを指摘している。ただ、「情」の内容については、「文は理が通っていることが要であるが、その中に情がこもっていなければ、理屈だけで中身の無いものとなる」もので、文にとって「欠くべからざるもの」であると説明するに止まっている。[11] もとより、野村氏の研究はこのことを主眼としたものではないが、「情」の内容についても分析の余地があると考えられる。そこで、本論ではこの点についても検討を進めていきたい。

（2）「明文案序」

黄宗羲は康熙十四年、「明文案序上」[12] の中で、自らのとらえた明代文学観を示した上で、『明文案』編纂の動機について述べている。以下「明文案序上」を検討していくが、その際には実際の『明文案』の形式と照らし合わせて「明文案序上」の内容を理解し、逆に『明文案』の形式の意味についても「明文案序上」から考察するという方法をとる。

まず黄宗羲は、明代の文人を明代以前の文人「韓・杜・欧・蘇・遺山・牧菴・道園」に較べて、一つ一つの文について見れば明代にも彼らの文と比肩しうる文があるが、一人の文人として見た場合、明代には彼らのように優れた存在は出なかったと考えている。[13] 優れた文人として唐以降の文人を挙げている点には、古文辞派を批判して唐以降の文を重視する黄宗羲の立場が現れていると言えるだろう。

次に、黄宗羲はその原因として、「場屋之業」、つまり科挙の受験勉強について言及する。黄宗羲によれば、銭謙益から「明文第一」と評される帰有光でさえも、しばしば「時文」、科挙のための八股文がその文の中に入ってしまっている。そしてその原因は、明代の人士の心の活力が科挙の

学問にそそがれており、その余力で古文を作っていたことだとしている。[14]明代に優れた文人が出なかった原因として、科挙が取りあげられていることは注目されるものの、ここではこれ以上のことは書かれていない。

続いて黄宗羲は、「前代古文之選」として『文選』から『元文類』までの四種を取りあげ、それぞれの問題点を指摘していく。具体的には、『文選』は修辞を主とし、『唐文粋』も『文選』と同様であり、『宋文鑑』は「政事」を主とし、『元文類』は「未成之書」であるとする。[15]その上で、「もし『明文案』を四選と並べてみると、（『明文案』の）文章の盛大さは、これらに勝っていると言えそうだ（若以文案与四選並列、文章之盛、似謂過之）」とまとめ、次のように説明を展開する。

そもそもその人が前代に及ばないのに、その文が反って前代に勝っているのは、まことに一つの形式によって名づけず、ただそのひたすら深い情へ向かっていくことだけを視ることによって、そしてこれを収集した。（夫其人不能及於前代、而其文反能過於前代者、良由不名一轍、唯視其一往深情、従而捃摭之。）（「明文案序上」）

黄宗羲は『明文案』の文が優れている理由として、『明文案』の編纂方法を取りあげている。すなわち、一つの形式にこだわらず、「その文がひとえに深い情へ向かっていくこと」を重視しているというのである。

ここで、黄宗羲は先に取りあげた前代までの総集を意識していると考えられる。黄宗羲から見れば、『文選』では「修辞」、『宋文鑑』は「政事」といったように、前代までの総集はそれぞれに主とするところがあった。これに対して、『明文案』は一つの形式によらず、「情」を基準として文章を選定したと言いたいのであろう。

実際の『明文案』の体裁を見てみると、「賦」からはじまり形式ごとに文章を収録しており、個々の文章は時代順に排列されている。それぞれの形式で、採録されている篇数も一定しておらず、作家によって大幅に異なる。ここから、形式を主とせず、情によって一篇一篇の文を選んでいた黄宗羲の意識が読み取れるのではないかと考えられる。

また「一往深情」については、既に野村氏が指摘しており、ひたすらに情が深まっていくことを意味したもので、黄宗羲が帰有光の文を評価する時にも使われている表現である。さらに、黄宗羲は「情」について次のように述べる。

古から今までの情は尽きることがないが、一人の情は、極まっているものと極まっていないものがある。（今古之情無尽、而一人之情、有至有不至。）（「明文案序上」）

情が「至」るというのは、「一往深情」によって深まった

情が、この上ない状態になることだと思われる。しかし黄宗羲は、現状ではこのような情感の極まった文が埋没してしまっているとする。

試みに考えてみると、三百年来、文集で世間に流通したり所蔵されたりしているものは千家を下らず、作家ごとに少ない者は数巻、多い者は百巻にも至る。その間に一二の情感の極まった文がないわけがあろうか。しかし社交文や雑編の中に埋没し、机の上に積み上がり、だれも見つけようとしない。たとえこれを見ても、陳腐な言葉が一様であるとして、すぐにまた棄て去ってしまう。もしその付和雷同の文を取り除けば、このうえない心情（至情）だけが露われ、溺れた人に手をさしのべて救い出すのにほかならない。（試観三百年来、集之行世・蔵家者不下千家、毎家少者数巻、多者至於百巻。其間豈無一二情至之語。而埋没於応酬訛雑之内、堆積几案、何人発視。即視之而陳言一律、旋復棄去。向使滌其雷同、至情孤露、不異援溺人而出之也。）（「明文案序上」）

黄宗羲は、まず明代に流通したり所蔵されたりした作家の個人文集が数多く、さらに一集ごとの分量も大部であると指摘する。その中には、情感の極まった文もあるが、同時に含まれている「応酬訛雑」の文章の中に埋没しており、誰かがその文集を繙いてみたとしても、陳腐な文言だけだとみなして一概に捨て去ってしまうという。そして、それらの陳腐な文言、すなわち「雷同」の文を取り除くことで、この上ない情の表現された文だけが現れると述べる。

この部分の記述も、実際の『明文案』の構成と対応している。『明文案』は、一篇一篇の文章を選び、文章の形式によって分類し、時代順に排列している。ひとつの分類の中で、同じ作家の文章を複数収録している場合には、続けて排列しているが、あくまでも形式による分類と時代による排列が先にあり、作家ごとに排列したものではない。このような『明文案』の構成には、作家の個人文集の中から優れた文章だけを抜き出して編纂するという黄宗羲の意図が現れていると考えられ、『明文案』は実際に「明文案序上」に見られるような「情」を重視する詩文観に基づいて編纂されたといえるだろう。

ところで、このような『明文案』の構成に対して、『明儒学案』は採録した学者ごとに文章を収録している。確かに、『明儒学案』でもその学者の文集・語録の中から取捨選択して収録しているものの、最終的な書物の構成は異なる。『明文案』で、作家ごとではなく一篇一篇の文を編纂するというスタイルをとった理由は、恐らく黄宗羲が「明文案序上」で書いている通り、明代には一人の文人として

大成した人物がおらず、それでもその中には優れた文章が存在すると考えたからだろう。帰有光及び銭謙益・艾南英は、『明文案』に文が多く採録されているが、『明儒学案』には採録されていない。前述したことから考えれば、黄宗羲は帰有光及び銭謙益・艾南英の文章の中に優れた文章を見出しつつも、彼らを優れた人物として手放しに称賛できなかった。

このことについて、「明文案序」では原因として科挙の学問を挙げるのみだった。そこで次に、黄宗羲が何を問題視していたのかについて、黄宗羲が編纂した明文総集の一つである『明文海』の評語から確認してみたい。

（3）『明文海』評語に見える「習気」

『明文海』『明文授読』には黄宗羲の評語が付されている。[16]「先夫子曰」と始まる評語は、黄百家の補鈔した黄宗羲の評語だと考えられるが、それぞれの文に対する黄宗羲の見方が窺える資料として併せて用いることとしたい。

その評語の内容は多岐にわたり、小伝と共に文章に対する評価を記載したもの、事実や情報を追加したものなどがある。例えば、『明文海』の楊慎「答李仁夫論転注書」に付された評語には、次のように言う。

先父は言った、楊慎、字は用修、新都の人であり、翰林修撰となった。升庵（楊慎）の文章は古くて奥ゆかしく、博学でありながら（一つに）融合していないことはなく、既に北地（李夢陽）のような先人の剽窃は無い。西涯（李東陽）の門下にあって、別に新境地を開いたのであり、これはよく西涯を学んだ者である。（先夫子曰、楊慎字用修、新都人、翰林修撰。升庵文章古奥、博而未嘗不化、既無北地之剽襲。在西涯之門、別開生面、斯為善学西涯者矣。）（『明文海』巻一七五、書二九）

この評語は、人物の簡単な紹介から始まり、その文の特徴を挙げ、さらに他の文人との関係から評価を加えている。特に、ともに李東陽の門下であった李夢陽と区別があることを明言しているのが特徴的といえる。李夢陽は古文辞派とみなされている人物であり、「北地（李夢陽）のような先人の剽窃」とされている通り、黄宗羲の評価は厳しい。しかし、李夢陽の同門である楊慎について、黄宗羲は「先人の剽窃は無い」と言っている。黄宗羲は古文辞派に関わりのある人をすべて否定したわけではない。ここから、黄宗羲が一篇一篇の文について判断しようとしている意識が読み取れるようにも思える。同様に、採録した文章の作者と古文辞派の文人との区別を明らかにしたものとして、黄省曾「難柳宗元封建論」に対する評語もある。

先父は言った……牧斎（銭謙益）は黄省曾が北学（李夢陽の学派）であることによって、批判すること甚だしすぎる。その実、五嶽（黄省曾）は李夢陽のほんのわずかの習気にも決して染まらなかったのである。（先夫子曰……牧斎因其北学、訾毀過甚。其実五嶽未嘗染空同一毫習気也）（『明文海』巻九二、論九）

まず、黄宗羲が銭謙益の考え方を訂正している点が注目される。黄宗羲によれば、銭謙益は李夢陽の学派であることによって黄省曾を批判していたが、黄省曾は李夢陽の「習気」に染まっていなかったという。ここから、黄宗羲は李夢陽らの習気に染まったあり方を問題視しており、習気に染まっていなければ、古文辞派に関わっていたとしても批判しなかったことがわかる。

評語は肯定的な評価だけでなく、否定的な評価もあるが、その中にも「習気」という言葉が現れる。例えば、王一鳴「裕州府君列伝」には「語に習気が多い。一時の空同（李夢陽）に法る者は大抵このようなものだ（語多習気。一時宗法空同者大概如是）」（『明文海』巻三八八、伝二）とあり、黄宗羲は王一鳴の言葉の中に習気を見出している。

黄宗羲のとらえる習気の内容を理解するために、次に艾南英「論宋禘祫」に対する評語をみてみたい。

先父は言った……彼の文は欧陽を模倣しており、その生のまま飲み込んでいるのは、やはり（古文辞派の）史・漢を模倣する習気のようなものだ。その理学にあっては、深い思索があることなく、時文の見解を固く守り、過去の儒者を批判し、後生の小童が学ばずに妄りなことを言う風潮を惹き起こした、その罪は大きい。（先夫子曰……他文摹倣欧陽、其生呑活剥、亦猶之摹倣史・漢之習気也。其於理学、未嘗有深湛之思、而墨守時文見解、批駁先儒、引後生小子不学狂妄、其罪大矣。）（『明文海』巻一百、論十七）

黄宗羲は、艾南英が欧陽脩の文を模倣していたことを批判し、古文辞派の「史・漢を模倣する習気」と同じようなものだとする。ここから、黄宗羲の問題視する習気の内容は、一つには過去の文を模倣することであったとわかる。艾南英は欧陽脩の文を模倣しており、その点では彼の批判する古文辞派と同じく習気に染まっていたのである。

また、艾南英の「理学」についても、「時文の見解を固く守り、過去の儒者を批判」したと問題視している。ここから、科挙の学問への固執と、過去の儒者に対する批判も、広く見れば黄宗羲の問題視する文における「習気」の一部と考えられるだろう。特に科挙の問題については、「明文案序上」でも指摘されていた。

しかし艾南英についても、黄宗羲は批判をしながらも文

章を採録しており、当該の艾南英の文章は『明文案』にも収められている（「宋史三論」『明文案』巻四十六）。ここから、たとえ作者本人に学問がなく、一面では習気に染まっていたとしても、一篇一篇をみて、必要があると判断すれば収録するという方針を徹底していたことを確認できる。

以上のように、「明文案序上」は、一つの形式によらず、「情」に基づいて明代の文章を選んだと述べており、この考え方は実際に『明文案』の構成に現れていた。そのような方法を取った背景には、一人の作家に優れた文章があっても他の多くの作品の中に埋もれているという黄宗羲の現実認識があり、それは『明文海』の評語によれば、作家が習気に染まっている状態だった。習気に染まった状態とは、具体的には過去の文を模倣することを中心として、科挙の学問へ固執することや、過去の儒者をみだりに批判することも含んでいた。次節では、『明文案』以外の黄宗羲の文章に対象を広げて、習気と「性情」重視の関係、そして「性情」の内容について分析していく。

第二節　文における性情と習気

黄宗羲は康熙十三年の「景州詩集序」において、「性情」が亡びてしまったことを憂慮している。

そもそも詩は性情を言う。高廷礼以来、声調を主張したことで、人の性情は亡んでしまった。しかしその説を天下に勝るに足るようにさせたのは、やはり天下の性情が、華美なものや汚らわしく人を惑わすものに往来し、浮いて動きやすいことに沈んだことによる。声調は浮いている物である、したがって手挟んで捨てると、（残っているのは）性情であるはずだ。（しかし）その性情がこのようであって止まるに過ぎなければ、このような者は詩人と言うことができない。（夫詩以道性情。自高廷礼以来、主張声調、而人之性情亡矣。然使其説之足以勝天下者、亦由天下之性情、汨没於紛華汙惑之往来、浮而易動。声調者浮物也、故能挾之而去、是非無性情也。其性情不過如是而止、若是者不可謂之詩人。）（「景州詩集序」『南雷文案』巻一）

黄宗羲はまず、高廷礼が「声調」を重視したことで、性情が亡んでしまったと指摘する。高廷礼（一三五〇年―一四二三年）は明初の文人で、初名は高棅といい、『唐詩品彙』『唐詩正声』を編纂した。特に『唐詩正声』では声律を基準として詩を選んだという[17]。黄宗羲が言っているのはこのことだと考えられる。

また「浮而易動」・「浮物」は、表層的で動きやすいものであり、声調を初めとした形式のことだと考えられる。つ

まり、高廷礼の説が世間に受け入れられたのは、社会全体の性情が、形式などの表面的で移り変わるものの中に沈んでしまったことが原因だとする。このような社会のあり方は、『明文海』評語で指摘されていた習気に染まった状態のことであると言えるだろう。

続いて黄宗羲は、「声調」を含めそれらの表面的なものを取り除けば、性情が存在しないわけではないと指摘する。「性情」に対して、習気は「浮物」、すなわち表面的なものであり、取り除くことができるととらえられている点が注目される。つまり黄宗羲の理想とする性情が表現されるためには、習気の除去が不可欠だったのである。これは、「明文案序上」で指摘される、「情至」の文章が多くの「応酬訛雑」の文章の中に埋没していることと同じ構造であり、黄宗羲の詩文における「性情」重視は、習気に対する批判と表裏一体のものであったと言える。

ただしこの文章では、「このような者は詩人と言うことはできない」と言っている。これは、作者が習気を除去しなければ性情を見出せないような文章を書いているに過ぎなければ、その作者は詩人とは呼べないということだと考えられる。これも、黄宗羲が「明文案序上」で、明代には優れた文人が出なかったと指摘したことと対応すると言えるだろう。

続いて同じ文章で、黄宗羲は性情がどのようなものか、説明を展開していく。

周伯弼（周弼）が三体詩に注釈したとき、景（光景）を実とし、意（人の心の意思）を虚とした。これは常人の詩を論ずることはできるが、詩人の詩を論ずることはできない。詩人は天地の清らかな気を集め、月露風雲花鳥を彼自身の性情としており、彼の景と意は分かつことができない。（周伯弼之註三体詩也、以景為実、以意為虚、此可論常人之詩、而不可以論詩人之詩。詩人萃天地之清気、以月露風雲花鳥為其性情、其景与意不可分也。）（「景州詩集序」）

『三体詩』は、南宋の周弼が唐代の詩を形式別に編纂し、注釈を施したものである。周弼は各句の表現しているものを「景」と「意」に分け、「景」の表現された句を「実」、「意」を表現された句を「虚」とし、その句の配置によって詩を分類していた[18]。これに対し黄宗羲は、その方法によっては「詩人の詩」を論ずることはできないとする。黄宗羲の指摘は、周弼の意図からずれているように思われるが、黄宗羲は恐らくこれをきっかけとして「景」と「意」について論及したかったのではないかと思われる。

黄宗羲によれば、詩人は月露風雲花鳥といった詩に描かれる光景をその性情としており、そこでは「意」と「景」、

つまり作者の心の状態と光景とは分離していないという。

このことについて、作者である主体の心に着目して考えてみると、対象に接した時、主体の心には感情が生じ、それが詩として表現されるといえる。この時、感情と対象は分離しておらず、ひとつとして詩に描かれる。したがって、黄宗羲にとって理想的な詩における「意」「性情」とは、対象と一体として表現されたものであり、主体と事物との関係を重視していると考えられる。

康熙十八年に書かれた「黄孚先詩序」においても、「情」と「意」によって理想的な詩が説明されている。

古の人は、情と物とが互いに関わり合い、互いを捨てることができなかった。ただ忠臣がその君主に仕え、孝子のその親に仕え、夫を思う婦人や悲痛な思いを抱いている人（の情）が、結び留めてほどくことができないだけでなく、風雲月露草木虫魚も、ひとつとしてまことの意の流通でないものはない。（古之人、情与物相遊而不能相舍。不但忠臣之事其君、孝子之事其親、思婦労人結不可解、即風雲月露草木虫魚、無一非真意之流通。）（「黄孚先詩序」『南雷文案』巻二）

黄宗羲によれば「情」とともに表現される対象は、君臣・父子・夫婦といった社会関係のみならず、「風雲月露草木虫魚」といった自然物についても含まれており、これらは「真意之流通」とされる。つまり、古の詩人はあらゆる対象に心を向かわせており、これこそが詩人の理想的なあり方だったのである。このことから、理想的な詩においては心より生じた感情が対象と密接に関わり、相互に不可欠な存在となっており、その対象は社会関係や自然物などあらゆるものを含んでいたといえる。

このような理想的な詩人が、常人とどのように異なるのかについては、「景州詩集序」で次のように述べられている。

常人が今まで月露風雲花鳥を詠ったことがないわけではない、（しかし、表現されているものが）その性情でなければ、（常人は）修辞を極めたとしても（対象と）親しんではいない。（常人未嘗不有月露風雲花鳥之咏、非其性情、極雕絵而不能親也。）（「景州詩集序」）

ここでは、「常人」の場合は自然界の光景を詩に詠ったとしても、性情を表現したものではないことが指摘される。「親」という表現は、対象に関わろうとする主体の態度を表すと考えられる。すなわち、黄宗羲によれば、「常人」は性情を表現しないまま修辞を凝らし、対象と向き合い対象に近づいていくことができないのである。

先に、「景州詩集序」の前の部分で、表面的なものの中に性情が沈んでしまったことが述べられており、このようなあり方が習気に染まった状態だと考えられることを指摘

した。「景州詩集序」の後の部分に登場する「常人」のようなあり方も、習気に染まった状態は、対象と向き合って性情を表現することができていない状態であると考えられる。

以上のことから、黄宗羲の「性情」を重視する詩文観の特徴は、主体と対象との関わりを重視するものであり、習気に染まった状態は、表面的なものに気を取られ対象と向き合えなくなっている状態だと言えるだろう。

次の「陸鈔俟詩序」でも「情」を重視する黄宗羲の詩文観が語られているが、この資料ではさらに二人の詩人の異なったあり方について述べている点に特徴がある。

「陸鈔俟詩序」ではまず、詩集の序文を求めてきた陸鏊（鈔俟は字）の詩を称賛する。[19]「情が有る（有情）」「詩句の並びは、自然とそうであるもので人為的な力によらない（排比之間、自然不仮人力）」（「陸鈔俟詩序」『南雷文定四集』巻一）といった表現は、黄宗羲にとって理想的な詩を表すものであると考えられるだろう。

ただ、「陸鈔俟詩序」はそれのみならず、次に同じ一族の陸符を取りあげて、「文虎の詩才と鈔俟の実践は、それぞれ互いに影響を受けたものではなく、要するにどちらも詩人であって、俗人ではない」（文虎之才力、鈔俟之工夫、各不相蒙、要之皆詩人、非俗人也。）（「陸鈔俟詩序」）と、最終的には両者ともに称賛する。

作風の異なる二人が、結局は二人とも理想的な詩人であると評価されることについて、「陸鈔俟詩序」はさらに説明を展開していく。

詩とは、天地万物を連ね写してみずからの精神・意志を広げるものである。俗人はおおむね書き写し出版したり模倣したりして、天地萬物と関わり合わない、どうして詩とみなすことができようか。（詩也者、聯属天地万物而暢吾之精神意志者也。俗人率抄販模擬、与天地万物不相関渉、豈可為詩。）（「陸鈔俟詩序」）

ここでは天地万物との関わりが重視され、天地万物を詩に描くことでみずからの「精神」・「意志」を表現するものが理想的な詩だとされる。一方で、「俗人」の書物を「書き写し出版したり模倣したり（抄販模擬）」する態度が、天地万物と関わり合わないものとして批判される。

その上で黄宗羲は「陸鈔俟詩序」において、「かの（陸符の）才能・（陸鏊の）修養は、どちらも人間の性情があらわれたものである（彼才力工夫者、皆性情所出）」として、「肺腑や骨髓は紛うことなく清らかであり、呼気や咳払いも紛うことなく気高い、どうしてふたつのものであろうか。（肝鬲骨髓、無不清浄、呿吟謦欬、無不高雅、何嘗有二。）」という比喩によって、性情を根源的なもの、「才力」「工夫」

を性情の表れたものとしてとらえ、「才力」と「工夫」は一つであると考えている。つまり、陸鏊と陸符は異なる作風であったが、その作風はともに「性情」の表れであったことから、優れた詩人とされたのである。このように、黄宗羲の「性情」観によれば、天地万物との関わりの中で生じた性情を表現することを重視することで、多様な作風の詩人がともに理想的な詩人と評価された。

さらに、黄宗羲の詩文観における「性」「情」の内容について、「馬雪航詩序」から考えてみたい。「馬雪航詩序」では、詩文における性情の重要性を指摘した上で、[20]「性」とはいかなるものかについて説明する。

そもそも性はどうして理解し易いことがあろうか。過去の儒者の性を言う者は、おおよそ鏡を喩えとしている、多くのすがたが妖しげに露れても、鏡そのものは澄然としており、その澄然として動かないものが性であると。これは空寂によって性を言っている。（夫性豈易知也。先儒之言性者、大略以鏡為喩、百色妖露、鏡体澄然、其澄然不動者為性、此以空寂言性。）（「馬雪航詩序」『南雷文定四集』巻一）

黄宗羲によれば、過去の儒者は性を「鏡」に喩えて、様々なものが映し出されても鏡自体は澄んでおり、その澄んで動かない存在が性だとしていた。しかし黄宗羲は、このような考え方は「空寂」によって性を言っているものだと指摘する。そして、次のように自らの考えを述べる。

しかし、我々が物事に対処する時、このようにすれば安らかであり、このようにしなければ安らかでない、このようなものが中に有るようだ。この安らかかどうかということが、つまりは性なのである。鏡は情の無い存在であり、喩えとするべきではない。（而吾人応物処事、如此則安、不如此則不安、若是乎有物於中。此安不安之処、乃是性也。鏡是無情之物、不可為喩。）（「馬雪航詩序」）

黄宗羲は「応物処事」、つまり具体的に事物に相対している時について述べていく。「安」「不安」は対象の事物に対する心の反応、すなわち心の動きである「情」だと考えられる。黄宗羲は、「如此則安、不如此則不安」と情が発現する時、鏡のような「物」が、心の中にあるように思われるという。しかし本当はそうではなく、「安不安之處」、すなわち「安不安」と変化して情を発現するところそのものこそが性であると指摘する。「鏡是無情之物」という表現からわかる通り、鏡はそれ自体が変化することがない、実体を持つものであるといえる。しかし黄宗羲の考える性は、心の中において、あらかじめ実体として存在するものではない。物の関わりの中で、常に変化して発現する情におい

てのみ、性の表出を見ることができるというのである。

そもそも、黄宗羲は具体的な事物に相対していることを前提としている。だからこそ、具体的な事物を離れてあらかじめ「鏡」のような性を措定してしまうことを危惧したのだろう。この部分との関わりから考えると、第一節で見てきた「習気」に染まったあり方とは、このような性のあり方が理解できなくなっている状態だと思われる。習気は、具体的には過去の文を模倣したり科挙の学問に固執したりする態度として現れるが、このような態度は一つの定まったあり方に固執していると言える。それは事物との関わりの中で様々に変化して発現する情と、そこから窺える性のあり方を十分実現できているとは言えない。

さらに「馬雪航詩序」は、人と物に賦された性が異なることを指摘[21]した上で、程頤と朱熹の性論に言及する。まず程頤については、次のように述べる。

程子が「性は即ち理である」と言うのは、違いが近いと言える。しかし、その澄み切って中にある時、身体の内全体がすべて惻隠の心であり、条理の見ることのできるものはない。（対象に）感じて四端となって、はじめて理と言うことができる。（程子言性即理也差為近之、然当其澄然在中、満腔子皆惻隠之心、無有条理可見、感之而為四端、方可言理。）（「馬雪航詩序」）

黄宗羲は、身体の内全体が惻隠の心であり、「条理」、すなわち個別の理はそこに見られないと指摘する。そして、事物との関係性の中で事物に感じて四端としてあらわれて、はじめてそこに理を見ることができるという。黄宗羲は、程頤の「性即理」によれば、性が理という定まったあり方として存在することになると考えた。しかし黄宗羲の考え方によれば、事物との関わりの中で四端として発現する前に、個別のあるべきあり方が予め有るのではないと言えるだろう。

次の部分では、朱熹を批判している。

朱子は、天が陰陽五行によって万物を生成変化させ、理もまた（万物に）賦していると考えており、やはり人と物を兼ねて言っている。そもそも物をその性に従わせれば、「触」とし「嚙」とし「蠢」とし「婪」とし、すべて同じではない、また道ということができるだろうか。」（晦翁以為天以陰陽五行化生万物、而理亦賦焉、亦是兼人物而言。夫使物而率其性、則為触為嚙為蠢為婪、万有不斉、亦可謂之道乎。）（「馬雪航詩序」）

黄宗羲は、天から生み出された万物に理が賦されているという朱熹の考え方を批判し、物の性がそれぞれ異なることを指摘した上で、それを道とすることはできないとする。先述した通り、黄宗羲はこの部分の前に、人と物との性の

違いを指摘していた。朱熹のように、万物に理が賦されていると考えれば、理を外部の事物の方に求めることとなる。黄宗羲はそのことを問題視していたと言えるだろう。

「馬雪航詩序」はこれらを総括して、「したがって性説が明らかでなくなってからの詩というものは、一人のたまたま露わになった性情にすぎなくなった。（故自性説不明後之為詩者、不過一人偶露之性情。）」とする。これは、黄宗羲が理想としていた心性観が世に行われなくなったと同時に、優れた詩人は出なくなり、「偶露之性情」しか存在しなくなったということだと考えられる。このような考え方も、一篇一篇の文を取りあげる黄宗羲の明文総集の編纂観と密接に関係していたと言えるだろう。

以上、本節では黄宗羲が詩文において重視する「性情」について分析をおこなった。黄宗羲にとって理想的な詩とは、詩人が対象と関わり合うことで生じた性情を描いたものであり、修辞への固執や書き写して出版したり模倣したりする態度は、対象と関わり合っていないとみなされた。逆に、作者が対象に向き合った結果としてその詩に性情が表れていれば、作風が異なっても理想的な詩人とされた。このような「性」と「情」のあり方は、性をあらかじめ固定的な実体のあるものとしてとらえず、事物との関わりの中で情として発現することが性であるとする、黄宗羲の「性」理解に基づいていた。そして、このような「性」理解は程頤や朱熹の性説とは異なっていたのである。

第三節　明末及び同時代の文人の習気

第一節で指摘した通り、黄宗羲が編纂した明文総集には、習気に対する黄宗羲の憂慮があらわれている。その習気の内容としては、過去の文の模倣が挙げられ、さらに科挙の見解への固執や、過去の儒者に対する批判も含まれていた。本節では黄宗羲の習気批判が、黄宗羲の他の文章にあらわれる明末及び同時代の文人批判に、どのように現れるかを確認したい。

「明文案序上」において、黄宗羲は明代に優れた文人が生まれなかった原因を、科挙の学問に求めている。そこで、まずは黄宗羲の科挙観について、簡単に確認しておきたい。

黄宗羲の代表作の一つとされる『明夷待訪録』「取士上」（康熙二年序）には、試験の改革案を述べたところに、「また一先生の言を墨守することを必要としない」（亦不必墨守一先生之言。）（『明夷待訪録』「取士上」）とあり、ひとつの学説を固く守ることを受験生に求めない立場をとっている。また『明夷待訪録』には時文についての言及もあり、時文がどれも時文を暗誦して書いたものであることを指摘

し、そのような借り物の教えを暗誦するよりも、過去の儒者の学問を暗誦することの方が良いと述べる。[22]このように、黄宗羲は一つの学説に固執して他の学説を批判するという点、及び過去の時文を暗誦して時文を作っている点で、科挙の学問のあり方を問題視していた。このようなあり方は、第一節で確認した習気の特徴と重なる。黄宗羲が「明文案序上」において、明代の文に対する科挙の学の影響を特に指摘していたのはそのためだと考えられる。

次に、康熙八年の「銭屺軒先生七十寿序」では、「至」であるか否かを基準とした銭謙益批判が見られる。

銭虞山（銭謙益）は一生涯太倉（王世貞）を批判し、崑山（帰有光）にのっとった。死後に評価が定まってみれば、私はただちに、銭氏は王世貞の程度に至って終わったと思うのである。思うに虞山の学問実践や見識については、その成就は彼がそうあろうとしたものではなかった。他ならず、そのこの上ないものを会得できなかったのである。（銭虞山一生訾毀太倉、誦法崑山、身後論定、余直謂其満得太倉之分量而止。以虞山学力識見、所就非其所欲、無他、不得其所至者耳。）（「銭屺軒先生七十寿序」『南雷文案』外集）

銭謙益は王世貞を批判して帰有光にのっとっていたが、銭謙益の死後になってみると、黄宗羲はただちに銭謙益が王世貞の程度に止まったと考えるようになったという。そしてその理由は、銭謙益が「至」であるあり方を理解することができなかったからだとされる。「至」というあり方は、「明文案序上」において「情」と「文」の理想的なあり方とされており、ここにも同じ詩文観が表れていることが確認できる。この「至」という概念について、黄宗羲はさらに文集の編纂に関連づけて述べている。

私は嘗て明一代の文を選定したが、その真に優れた文人と呼べる者は十人に満たなかった。はたしてこの十人の外に、更に一篇の文章も無いと言えるだろうか。そのはずはない。したがって平生は文によって名が通っているのではなく、たまたま見るべきものの一二篇がある者もいる。その文は優れた文人でも超えることができない。思うにその人の身の経験したこと、心と目の理解したことに、それぞれこのうえないものが有ったから、文はついに覆い隠すことのできないものになったのである。そうであれば、文を学ぶ者もやはりそのこの上ないことを学ぶだけだ。（余嘗定有明一代之文、其真正作家不満十人。将謂此十人之外、更無一篇文字乎。不可也。故有平昔不以文名而偶見之一二篇者。其文即作家亦不能過。蓋其身之所閲歴、心目之所開明、各有所至焉、而文遂不可掩也。然則学文者亦

学其所至而已矣。）（「銭屺軒先生七十寿序」）

「余嘗定有明一代之文」は、『明文案』の編纂を指すと思われる。黄炳厓『黄梨洲先生年譜』巻下によれば、黄宗羲は康熙七年頃から『明文案』の編纂を始めている。

黄宗羲は明文を一篇一篇見ると良い文章が存在する理由として、次のことを挙げる。すなわち、「其身之所閲歴、心目之所開明」、つまりそれぞれの場面における経験や体得が、それぞれ「至」という状態を有していれば、その文も素晴らしいものとなるというのである。そして「学文者」は、それぞれの文の「至」を学ぶべきだとする。

以上のことから、黄宗羲にとって理想的な文である「至文」とは、それぞれの場面における作者の経験や体得における「至」なるものが表現されたものであると考えられる。そして黄宗羲から見れば、銭謙益は結果として文にあらわされた作者の「至」なるものを理解することができなかった。そのため、銭謙益自身の学問実践と知識もまた、理想的な境地に及ぶことができなかったのである。

このように、黄宗羲は自身の理想とする詩文観を基準として、明末及び同時代の文人達を批判している。次の文章では、修辞の偏重や模倣を批判しており、その中には「入情」という表現もみられる。

わたしが思うに、今日の古文の法は亡んでしまった。銭牧斎は当世の欠点に基づいて、先民の方式に帰ろうとしたが、得るところは文章の構成や修辞の間にあって、かえって情に入ることができなかった。艾千子（艾南英）の文を論じた書は、それでも時には優れたところがあったが、作った文は模倣がひどすぎ、只だ王李（王世貞・李攀竜）を模倣する者と上っ面を争っただけである。（余謂、今日古文之法亡矣。銭牧斎椅摭当世之疵瑕、欲還先民之矩矱、而所得在排比鋪張之間、卻是不能入情。艾千子論文之書、亦儘有到処、而所作摸擬太過、只与摸擬王李者争一頭面。）（「前翰林院庶吉士韋菴魯先生墓誌銘」『南雷文案』巻七）

康熙十五年に書かれたこの資料では、銭謙益を「不能入情」という点から批判している。「先民」とは銭謙益の重視した杜甫や帰有光のことだと考えられる。黄宗羲からすれば、銭謙益は彼らから、「排比鋪張」、すなわち文章の構成や修辞しか学び取ることができなかった。そして艾南英については、「模擬太過」であり、王世貞・李攀竜を模倣する人々と同じ次元の争いになっているとする。

ここには、模倣に代表される習気に対する黄宗羲の懸念が表れているといえるだろう。黄宗羲の見方によれば、そもそも王世貞や李攀竜ら明代の古文辞派の人士は、彼らにとっての「古文辞」を模倣していた。そして銭謙益・艾南

英の時代には、「摸擬王李者」、すなわち古文辞派の文を模倣する人々も存在した。銭謙益や艾南英はそれらの人々を批判したが、銭謙益の文の理解は形式に止まり、艾南英には模倣という問題点があった。黄宗羲はこのような人々のそれぞれのあり方に、習気を見出したといえる。

さらにこの文章では、「入情」を重視して模倣や修辞の偏重を批判している。模倣や修辞の偏重は万物に関わろうとする態度とは言えないため、模倣による文は「情」を表現した文とは言えないという論理であり、ここにも性情を重視し習気を批判する構造が見て取れる。

以上のように、黄宗羲の明末及び同時代の文人に対する批判は、「至」であることや、「入情」といった黄宗羲の詩文観と表裏をなしており、やはり性情を重視し習気を批判する黄宗羲の詩文観に基づいていると言える。

さらに、次の「范道原詩序」では特定の流派によりながら、あるべきあり方に到達できない人々を問題視している。まず、「四書纔畢、即辨朱陸異同」と学問について、「今古未分、即争漢宋優劣」と歴史について、それぞれわずかに学んだだけで学派の違いを議論することを批判している。その上で、詩文においても同じ問題が起こっていたことを述べていく。

詩を言うことに至っては、唐と宋の主従を決め、これを述べ広げて北地・太倉・竟陵・公安となった。北地・太倉を研究する者は、はたして北地・太倉のような学問があるのだろうか。竟陵・公安を研究する者は、はたして竟陵・公安の才情が有るのだろうか。(至於言詩、則主奴唐宋、演之而為北地・太倉・竟陵・公安。攻北地・太倉者、亦曾有北地・太倉之学問乎。攻竟陵・公安者、亦曾有竟陵・公安之才情乎。)(「范道原詩序」『南雷文定三集』巻一)

黄宗羲によれば、明代の詩文の流派は、唐と宋のどちらを主とするかに始まり、さらには北地(李夢陽)・太倉(王世貞)・竟陵(鍾惺、譚元春)・公安(袁宗道、袁宏道、袁中道三兄弟)といった流派に別れていった。しかし、北地・太倉を研究する者は、本来の北地・太倉のような学問がなく、竟陵・公安を研究する者は、本来の竟陵・公安のような才情がないという。つまり、特定の学派によりすがりながら、自分自身の学問はないという態度を黄宗羲は問題視しているといえる。

同じ資料の後半部分では、銭謙益についても言及する。

虞山(銭謙益)は両派についてそれぞれに批判することがあった。私は閻古古(閻爾梅)と盧山で会ったところ、彼は激しく虞山の評選の誤謬を誹った。今、古古の文集が出たが、おおよそ多くは表面的なものであ

り、まったく情によることばが無かった。また（彼が）虞山を誹っていた言葉によってこれを誹らざるをえないのである。（虞山於両派各有訾嗷。余遇閻古古於廬山、極詆虞山評選之謬。今古古集出、大略多是門面、絶無情語、又不得不以詆虞山者詆之矣。）「范道原詩序」）

錢謙益は北地・太倉と竟陵・公安の両方の系統を批判していた。一方で閻爾梅は錢謙益の「評選之謬」を批判していたが、閻爾梅の文集は「絶無情語」であり、錢謙益に対する批判と同じ批判が当てはまるという。ここでも、黄宗羲は閻爾梅の文集に「情」の現れた言葉がないことを批判している。黄宗羲は錢謙益や閻爾梅ら「今人」について、自らの詩文に「情」を表現することをしないまま互いに批判し合っていることを問題視しているといえる。

以上のように、黄宗羲の明末及び同時代の文人批判は、性情を重視し習気を批判する詩文観によって展開されていた。黄宗羲は明末及び同時代の人々が、目前の事物に向き合って生じた深い情を表現するのではなく、先人を模倣し、形式に固執し、他者に依存して他者を批判しているととらえた。そしてそれらを批判することで、黄宗羲は自身の詩文観を表現していったといえる。

ここで、錢謙益に対する批判についてもふれておきたい。たしかに黄宗羲の錢謙益批判には錢謙益に対する個人的な反感も認められるものの、黄宗羲が自身の詩文観に基づいて錢謙益を批判していた側面も認められると言える。黄宗羲は、錢謙益が習気に染まっているとみなしていた一方で、錢謙益の批判のみを目指していたのではなく、例えば閻爾梅のような別の人間が、自身の詩文を省みずに錢謙益を批判することも問題視していた。黄宗羲の評価基準は、どのような流派や方法を支持するかということではなく、あくまでも「情」を詩文に表現できているかということだったと考えられる。

おわりに

『明文案』の構成は、「明文案序上」に見える黄宗羲の詩文観に基づいていたと言える。その詩文観とは、習気を批判し「情」を重視するものであり、対象との関わりを前提とする黄宗羲の性情観に基づいていた。一方、習気に染まった態度は、それに程度の差はあったとしても、対象に真摯に向き合っていないことが原因である点で問題視された。また習気批判は、過去及び同時代に対する黄宗羲の問題意識とも関わっていることを確認した。

本論は、『明文案』と同時期に編纂されたと考えられる『明儒学案』検討の前提作業というねらいがあった。特に黄宗

義が「情」を文章の取捨選択の基準としていた点は、『明儒学案』における学者の取捨選択の基準について考える上でも参考になると思われる。もちろん、『明儒学案』は学者ごとにその履歴と著述を収録しており、対象も形式も『明文案』とは異なる。今後は、黄宗羲の詩文観及び『明文案』の編纂と対照させながら、『明儒学案』そのものの検討を進めていく必要がある。

注

（1）拙稿「黄宗羲の思想――劉宗周思想の受容から「自得」の重視へ」『集刊東洋学』一〇八号、二〇一三年

（2）福本雅一「黄宗羲の文学観」『史泉』二三・二四、一九六二年

（3）野村鮎子「黄宗羲『明文案』考」『学林』一九、一九九三年

（4）注2参照。また、西村秀人氏は、黄宗羲の詩には「性情」があり、「詩心」が黄宗羲の学問の根柢になっていたとする。「遺民黄宗羲の詩論について」『人文論叢』三九、一九九一年。

（5）項念東「上下千古 自治性情――黄宗羲詩学思想的創新性」『岳陽職業技術学院学報』、二〇〇七年五期

（6）項念東氏は、「性情」を把握する営みである「知詩」が『明儒学案』「発凡」において「宗旨」を重視することと同じ論理であると指摘している（「黄宗羲詩学思想的哲学色彩」『文芸理論研究』、二〇〇六年二期）。氏の指摘は興味深く、今後検討していく必要があると思われる。

（7）注2参照。

（8）野村鮎子「黄宗羲の帰有光評価をめぐって」『学林』一七、一九九一年

（9）注3参照。

（10）また、黄宗羲が晩年に銭謙益を批判していながら、銭謙益の文を多く収録したことについて、野村氏は「依然として銭謙益の文学史的地位を自覚していたに違いない」とし、「黄宗羲の文集中に繰り返される銭謙益批判は、敬慕しながらもそれを憎み、そうすることによって銭謙益を超えようとした彼の内的葛藤の表れではなかろうか」と述べ、銭謙益を収録した「『明文案』『明文海』の真価は、こうした個人的感情を超越しようとしたところにある」のではないかと推測する点については、詳しい検証が必要だと思われる。注3参照。

（11）注8参照。

（12）「明文案序下」では明代の詩文の変遷について述べられている。なお、野村鮎子氏が指摘している通り、「明文案序」には諸本間で文字の異同が存在する。本論では『明文案』書前「明文案序」を底本とした。

（13）「蓋以一章一体論之、則有明未嘗無韓・杜・欧・蘇・遺山・牧菴・道園之文。若成就以名一家則如韓・杜・欧・蘇・遺山・牧菴・道園之家、有明固未嘗有其一人也。」（「明文案序上」）

（14）「議者以震川為明文第一、似矣。試除去其叙事之合作、時文境界、間或闌入、求之韓欧集中、造次発言、亦無是也。此無他、三百年人士之精神、専注於場屋之業、割其余以為古文、其不能尽如前代之盛者、無足怪也」（「明文案序上」）。傍線部は、野村氏が諸本間で異同があることを指摘した部分である。『南雷文定前集』ではこの部分を「較之宋景濂尚不能及」に作っている。この原因について、野村氏は黄宗羲の銭謙益観との関わりを指摘している。

（15）「前代古文之選、『昭明文選』・『唐文粋』・『宋文鑑』・『元文類』為最著。『文選』主於修辞、一知半解、文章家之有偏覇也。『文粋』掇菁撷華、亦『選』之鼓吹。『文鑑』主於政事、意不在文、故題有関係而文不称者皆所不遺。『文類』則蘇天爵未成之書也、碑版連牘、刪削有待。」（「明文案序上」）

（16）呉光氏は『黄宗羲全集』において、『明文海評語彙輯』『明文授読評語彙輯』を編集し、それに対して解説を加えている。本論では呉光氏の彙輯本を用いた。沈善洪主編、呉光執行主編『黄宗羲全集　増訂版』、浙江古籍出版社、二〇〇五年。以下、黄宗羲の文章は『黄宗羲全集』に基づき、句読点は適宜改め、本文中の符号は発表者が補った。また、『南雷文案』等の『黄宗羲全集』の基づく所出も示した。

（17）「唐詩正声凡例」に「題曰正声者、取其声律純完、而得性情之正者矣」とあり、『唐詩正声』は「声律純完」を基準としていた。蔡瑜『高棅詩学研究』（国立台湾大学出版委員会、一九九〇年）参照。

（18）村上哲見氏の解説に詳しい。村上哲見著『三体詩』（新訂中国古典選一六―一七）、朝日新聞社、一九六七年

（19）「纏綿而有情、感慨而多致、排比之間、自然不仮人力、顧千鎚百錬所不易及。」（「陸鈔侯詩序」）

（20）「詩以道性情、夫人而能言之。然自古以来、詩之美者多矣、而知性者何其少也。蓋有一時之性情、有万古之性情。……故言詩者、不可以不知性。」（「馬雪航詩序」）

（21）「又以人物同出一原、天之生物有参差、則悪亦不可不謂之性、遂以疑物者疑及於人。……人之性則成不忍、亦猶万物所賦之専一也。物尚不与物同、而況同人於物乎。」（「馬雪航詩序」）

（22）「今日之時文、有非誦数時文所得者乎。同一誦数也、先儒之義学、其愈於餖飣之剿説亦可知矣。」（「取士上」）